

掲載された内容はすべて鳴門生徒指導学会に帰属するものである。

Copyright 2010 Naruto Association of School Guidance and Counseling

## 「コラージュ療法」について

- 研究会で解説する基本的内容 -

川瀬 公美子

### 要 約

日本でコラージュ療法が広く知られるようになって、20余年である。本療法に新たに取り組みたいという方は、大抵の場合、まず自らが制作体験をすることを勧められる。

筆者が所属する徳島箱庭コラージュ療法研究会においても、毎年制作体験をする機会を設け、さらにコラージュ療法について解説をしている。

コラージュ療法は、芸術療法に属する方法である。1987年に森谷寛之が、箱庭療法の本質を「レディ・メイドの組み合わせ」にあるという中村雄二郎の発言にヒントを得て、コラージュの価値を再発見し、箱庭療法に匹敵すると考え、思いついた方法である。なお、コラージュ自体は芸術の技法であり、1910年代にピカソらによって導入された。その後、外国では作業療法や芸術療法としても使われていたが、多くの芸術用法のひとつという位置づけであった。

本論では、森谷が始めた「コラージュ療法」について紹介する。そしてそれに加えて、筆者のこれまでのコラージュ療法の取り組みや考察を述べる。

キーワード：コラージュ療法，コラージュ，心理療法，実施上の留意点

### はじめに

日本でコラージュ療法が広く知られるようになって、20余年である。本療法に新たに取り組みたいという方は、大抵の場合、まず自らが制作体験をすることを勧められる。

徳島箱庭コラージュ療法研究会<sup>(注 1)</sup>においても、毎年度初めに開かれる研究会において制作体験を行い、またコラージュ療法についても解説している。

本論では、上記研究会において解説している「コラージュ療法」についてまとめる。特に、本療法の誕生に関しては、発案にいたる意図も含めて正確に引用し、丁寧にまとめるよう努めた。実は、コラージュ療法の歴史に関して重大な誤りがあることが2006年に明らかになり、これに伴い、歴史の認識に関して訂正をしなければならない事態になっているためである。本論では、正しい歴史についてのみ記した。もちろん、誤りに関する説明と訂正を示す必要があると筆者は考え、注記という形で記した。

なお、解説に用いるコラージュ療法についての基礎的な文献として、1993年の『コラージュ療法入門』がある。また、日本コラージュ療法学会<sup>(注 2)</sup>発足にあたり2010年に森谷<sup>1)</sup>がまとめ

たものがある。これらを主に参考にして、まとめたい。

以上に加えて、筆者のこれまでのコラージュ療法の取り組みや考察を述べたい。

### コラージュとは

コラージュCollageとは、「にかわづけ、糊づけ」という意味のフランス語であるが、芸術の表現技法の1つである。森谷<sup>2)</sup>は以下のようにまとめている。

「コラージュはもともとピカソ（Picasso,P.1881-1973）やブラック（Braque,G.1882-1963）によって芸術の一つの技法として20世紀の初めに登場してきた。芸術家が自分独自のものを創作するのではなく、社会的産物である既成のイメージを切り貼りして作品を作るという発想の転換は、以後の20世紀芸術に大変革を与えることになった。」

また、美術史におけるコラージュについては、入江<sup>3)</sup>、今村<sup>4)</sup>もまとめている。

### 心理療法におけるコラージュ

森谷<sup>5)</sup>は「心理療法とは」として、コラージュ療法について以下のように言及している。

「コラージュ療法は、心理療法の一分野である芸術療法に属する方法である。まず、心理療法とは、19世紀の終わり頃から20世紀の初めにかけて、フロイトの始めた精神分析から発展したものと見てよいだろう。フロイトは、『精神分析入門』の冒頭で次のように定義している。（引用部分について、筆者中略）

つまり、精神分析（心理療法）とは、医師（カウンセラー）と患者（クライアント）との間での対話そのものである。フロイトはその対話の手段を『言葉のやり取り』だけと考えたが、その後、芸術療法家は、言葉以外の様々な方法（絵画、箱庭、粘土、音楽、ドラマ、舞踊など）でもそれが十分可能であると主張するようになる。コラージュ療法は、芸術の技法のひとつであるコラージュを主として利用しようとするものである。すなわち、コラージュを通してクライアントは様々な心の内実を訴えることが可能となり、カウンセラーはクライアントの気持ちをもより正確に理解することができるようになる、その結果、心理療法が進むという仮説から出発している。コラージュはこの相互交流の手段として、非常に重要な役割を果たすことができる。単に美的作品を作るという意味でのコラージュ制作と、心理療法としてのコラージュ療法とはこの点において明確に区別される。コラージュ療法では作品の美的価値は全く問題にならない。」

さらに、森谷<sup>6)</sup>は、「コラージュと心理臨床の関係」として以下のようにまとめている。

「コラージュが心理臨床分野に導入されるようになったいきさつははっきりしていない。最初は、1970年代初期、アメリカで作業療法のひとつとして導入されたいらしい。後に芸術療法としても取り入れられるようになったようである。アメリカやヨーロッパでは、様々な芸術的技法が使われており、その中の一つとしてコラージュも使用されている。しかしながら、それだけを『コラージュ療法』と呼ぶことはないようである。諸外国ではその起源がはっきりせず、

多くの芸術用法のひとつという位置づけである。」

なお、森谷<sup>7)</sup>は「臨床場面でのコラージュ技法の歴史」として先行研究についてまとめている。ここでは、「コラージュ」という術語や日本で使用されている「コラージュ・ボックス法」「マガジン・ピクチャー・コラージュ法」の初出についても言及している。そして、森谷<sup>8)</sup>は「これらの名称を使い分けて定義し導入した。特にコラージュ・ボックスの概念は海外にはない」と述べている。

### 日本での心理療法におけるコラージュおよび「コラージュ療法」の誕生

治療技法として、積極的にコラージュを導入した報告例は、森谷<sup>9)</sup>からである。その発案にいたる過程については、森谷が『コラージュ療法入門』に詳しく述べている<sup>10)</sup>が、以下にまとめたものもあるので、引用する<sup>11)</sup>。

「コラージュ療法は日本において偶然の機会に見いだされ、独自の起源と発展をたどってきた。日本では箱庭療法が直接のモデルになっている。箱庭療法は1965年、河合隼雄先生によって、スイスから日本に伝えられ、その巧みな指導のおかげで大きく発展してきた。しかし、この方法はかなり大がかりな設備を必要とする。箱庭の設備のない環境においても、箱庭技法に匹敵するような有効性を持ち、かつ簡便な方法が求められていた。そのような中、1987年5月、森谷寛之はたまたま雑談中に、箱庭療法とコラージュの本質的關係に気づき、コラージュの持つ意義の重要性を再発見した。森谷は箱庭療法の本質とは、『立体のミニチュア玩具（レディ・メイド）を砂箱の中に並べることにある』（中村1984）という認識に至った。つまり、『平面の絵や写真（レディ・メイド）を台紙の上で組み合わせ、貼り付けること』でも箱庭療法と同じような効果を持つはずだと考えた。すぐに心理臨床実践に導入し、その有効性を確認し、理論化し、1987年12月に学会発表した。」

この最初の報告とは、1987年12月5日の東海精神神経学会における「心理療法におけるコラージュ（切り貼り遊び）の利用」と題して行われた発表である<sup>(注 3)</sup>。この発表抄録に収められた論文は、非常に入手しにくいので、以下に全文を掲載する。

「この研究は箱庭技法をより簡便にし、その利用範囲(たとえば、箱庭設備のない各病棟などでの実施)を拡大しようという試みから始まった。この目的のためにまず、考えられるのは、箱庭をさらにミニチュア化することである。しかし、この試みの最大の難点は砂の問題と玩具の大きさをどうするかという点になる。このために今までこの試みに成功した人はいないようである。

さて、箱庭技法において砂を使用することに劣らず重要なことは、表現の手段として“既製品”を使うことである。その方法として、新聞・雑誌・パンフレットなどの切り抜きを用意しておき、患者はそれらの中から自分の気に入ったイメージを選び出し、画用紙に貼りつける。この技法は、筆者のオリジナルではなく、ピカソをはじめとする現代美術の重要な技法の1つであるコラージュである。ここではこの技法を適用した症例のいくつかを報告した。」(森谷寛

之の最初の学会発表(1987.12)の抄録全文<sup>9)</sup>)

コラージュは美術の表現技法であり、上記において森谷も「この技法は、筆者のオリジナルではなく、ピカソをはじめとする現代美術の重要な技法の1つであるコラージュである」と明記している。このコラージュと、箱庭療法の本質的關係「レディ・メイドの組み合わせ」に気づき、コラージュは箱庭療法に匹敵するはずだと、森谷は考えた。「コラージュの価値の再発見」<sup>12)</sup>である。この発想が、森谷のオリジナルである。他の研究者がコラージュ療法を創始してもおかしくなかったにもかかわらず、「コラージュ療法未満」<sup>12)</sup>の状態であったことについて、森谷<sup>12)</sup>は2つの理由を考えている。コラージュ療法を必要とする動機づけの欠如と、効果を証明できる理論がなかったことである。そして、その理論とは、森谷が公式的に表現した、「レディ・メイドの組み合わせが意味を持つ」というこの一言に尽きると、筆者は考える。

こうして、単に美的作品を作るという意味でのコラージュ制作と、心理療法としてのコラージュ療法が、明確に区別されるものとなった。この区別が、1987年の発表により公にされたのである。

抄録論文では「コラージュ」に「切り貼り遊び」と説明が添えられている。はっきりとした日付は覚えていないのだが、筆者は以前、森谷が「切り貼り遊び」という言葉を見つけるのにとっても苦心したと話しているのを聞いたことがある。その時の筆者はこの意味の深さに気づいていなかったが、今考えると、この「切り貼り遊び」という説明により、コラージュは遊び、つまり過程そのものに意味を見出していると強く感じる。この時点で「コラージュ」が作品制作のための単なる技法ではなく、心理療法の1つとしての「コラージュ療法」として誕生したと筆者は考えるのである。

なお、その後の、コラージュ療法の歴史<sup>(注4)</sup>は次のとおりである<sup>8)</sup>。

1987年5月、森谷がコラージュ療法を発想。

1987年12月、森谷が東海精神神経学会で発表。

1988年5月、森谷前述の発表の抄録が、精神神経学会誌に掲載。

1989年11月、森谷が、日本芸術療法学会で発表。同学会において、杉浦・入江も発表。

1992年、『体験コラージュ療法』(山王出版)が出版される。ただし本書は『コラージュ療法入門』よりも後から計画されたにもかかわらず、先に出版された。

1993年、『コラージュ療法入門』(創元社)出版。

1993年、ランドガーデン『マガジン・フォト・コラージュ』(2003年翻訳)。本書では、コラージュはTATに匹敵するはずと考察された。

なお、森谷が発案する1987年以前には、山中<sup>13)</sup>の報告例があるが、これは、クライアントが自発的にコラージュを作成したものである。山中自らは治療として提示することがなかったことについて、「患者さん自身が自分で(コラージュを)選ばれる時は、そのまま拝見していたのですが、それをこちらから提示する発想まで転換できなかったわけで、(今日の発表<sup>(注5)</sup>)は大変面白かった。(箱庭とコラージュの関係も)全部気がついていたんです。しかし、そ

れを新しい治療として提示することに気づかなかっただけ」と述べている<sup>10)</sup>が、森谷<sup>12)</sup>によると、山中(1986, 1989)の論文から判断する限り、1989年の段階で箱庭とコラージュの関係について気づいていたという証拠はないと言わざるを得ないという。研究においては公に発表することで功績として認められるが、公にされない限り認めがたい。この点から山中が上記の関係に気づいていたという確証は非常に乏しいと、筆者は判断する。

したがって、山中の報告は、作品制作のための技法としてのコラージュであり、心理療法の技法として森谷が発想したコラージュ療法とは異なると、筆者は考える。

### コラージュ療法の特徴

コラージュ療法が箱庭療法をモデルに発案されたことは、前述の通りである。したがって、その特徴について述べられる際にも、箱庭療法と関連づけられることが多い。

特徴として、以下があげられる。レディ・メイドを用いる。手軽で持ち運びが容易であり、かつ手続きが簡単である。多くのイメージを取り込める可能性があり、具体的なメッセージを持つ。箱庭療法と異なり、イメージの図柄が繰り返し使えない、などである。

また、森谷<sup>14)</sup>は、コラージュは箱庭療法とともに、オープン・アーキテクチャ(開かれた設計思想)が採用されていると述べている。これは、切り抜きの準備、手続き、解釈などが限定されておらず、治療者に任されているところが多いことを指している。

以上のように、箱庭と関連づけて述べられることが日本では多いのだが、海外においては、箱庭療法と関連づけて考えられてこなかった。むしろ、T A Tなどと比較されることが多かった<sup>15)</sup>。森谷<sup>11)</sup>も「諸外国では、コラージュと箱庭療法は無関係なままである」と述べている。また、今村<sup>16)</sup>は、箱庭療法の延長としてコラージュが発想されている点について「日本におけるコラージュ療法における独自性」と述べている。

コラージュ療法の特徴や適用について、森谷<sup>11)</sup>は次のようにまとめている。

「コラージュは身近にあるパンフレットや雑誌から題材を借りることによって、絵も描けない幼児から老人まで幅広く適用することができる。また、健康的な人から、うつ病の精神病水準の人たちまでも適用することができる。コラージュは手軽さ、適用範囲の広さと表現能力の多彩さ、豊かさの特徴としてあげることができる。現在では、学校、病院、施設など非常に多くの場所で実践されている。

コラージュは比較的 안전한方法であると言われている。それは日頃、見慣れたイメージを素材にしていることが一因である。また、いろいろな段階で表現を忌避することができる。表現しない自由も与えられている。切り抜きを選ぶ段階、いざ貼り付ける段階でも忌避できる。また、表現したくない場合、自分の気持ちとは無関係なイメージを敢えて貼り付けることができる。表現する自由と表現を忌避できる自由があることが重要である。このように比較的 안전한方法とは言え、適用するにあたっては心理療法の基本ルールに則り慎重にすべきことは当然である。」

コラージュの安全性については、中井<sup>17)</sup>も言及しており、「ありきたりの図形をまず下見してから自分の思うように切り抜くのであり、嫌ならパスすればよい」などの回避性があることから、「回避性があるということは安全性が高い」と述べている。

## 実施方法

コラージュ療法の実際<sup>8)</sup>は、心ひかれるイメージや言葉を切り抜く、集める、台紙の上で構成する、貼り付ける、というものである。

### 1. 用意する物

糊、ハサミ(先の丸いもの)、雑誌・パンフレットなどの切り抜き、台紙(大きさはA4から四切画用紙)、ペンなど。

### 2. 切り抜きの用意

以下の2つのやり方がある。いずれの方式も、クライアントの心を表現できるようにレディメイド(既成)の材料を用意しておく、という点で共通している。

#### a. コラージュ・ボックス方式

セラピストが、制作者(クライアント)に必要であろう絵や写真、文字などのイメージを切り抜き集め、箱に入れておく。そこから制作者が選び貼り付ける、という方法である。

この方式の長所は、セラピストが切り抜き内容を把握できる、危険なイメージを除くこともできる、相手に合わせて内容を調整できる、制作時間の短縮、箱に入れて持ち運び可能、制作者はまとめることが容易になる、等の点である。

短所は、セラピストの想像力による制限、あらかじめ切り抜く手間がかかる、等である。

#### b. マガジン・ピクチャー・コラージュ方式

雑誌等から、制作者自身が、選び、切り抜き、貼り付けるという方法である。

長所は、集団的使用に適する、制作者自身の身近な材料を選ぶことができる、セラピストの予想を超える表現が生まれる、等がある。

短所は、制作者の想像力による制限がある、制作時間がかかる、イメージがマンネリ化する、等である。

これらはかつて区別されていた<sup>18)</sup>。しかし、森谷<sup>19)</sup>はこれら2つのやり方は「実は同じ意味。併用が望ましい」と述べている。そして次のように記している<sup>19)</sup>。「この概念は1993年『コラージュ療法入門』で森谷が外国の論文中の言葉から選び、定義づけし、導入したもので、外国にはない概念」「森谷の提案『レディ・メイドの組み合わせが重要』というスローガンは包括的な概念で両方を含む。2つの方法は状況で使い分ける程度の差しかない。」

また、切り抜きについて森谷<sup>19)</sup>は「コラージュ療法は切り抜きイメージが重要。心の成長を促すようなイメージが用意できるか」とあり、その内容について次のようにまとめている。

発達課題にふさわしいイメージ

喜怒哀楽など心の内実を表現可能にするもの

何か心の癒しにつながるもの

新しい可能性を示唆するもの（人物を貼らない人には人物を入れる，人物ばかりを貼る人には景色や食べ物などそれ以外のもの，その人が避けているもの）などを強制でない形で用意する

相手が何を気に入るか不明であるので，できるだけ幅広い分野から集めると無難  
大きな切り抜き（クローズアップ）も小さな切り抜きも必要

意味もないと思うようなものも時には必要，表現したくない人もいる

全部揃えようとしなくても可能

切り方はラフな形で（余白を残したままで）

### 3．方法

教示として，「ここにある切り抜き（雑誌，カタログ）の中から，気に入ったもの，気になったものを選び出し（切り抜き），台紙の上に好きなように貼ってみて下さい」と言う。教示は限定されているわけではなく，以上の内容が伝わればよい。逆に過剰に説明する必要もない。

制作に取りかかると，セラピストは制作者の制作過程を見守る。

制作後は，作品について，制作者とセラピストが一緒に眺めながら話をする。制作中，あるいはできあがった作品について，説明してもらったり感想を交わしたり，作品について思うところを話す。この際，解釈的なことを言う必要はなく，作品を味わうように二人で見るとよい。

以上が基本的な方法である。この他に，M S S M + C，交換コラージュ，連想コラージュなどがある<sup>20)</sup>。

### コラージュ療法における解釈

コラージュの解釈は，コラージュ療法が知られるようになった当初は，箱庭作品や絵画の見方，夢分析の方法などを参考に，特にコラージュ療法が箱庭療法から発想したものであることから，箱庭療法をもとにした見方，解釈の仕方が参考にされてきた。それは，作品を個々に見た場合，作品に統合性があるか，空間配置，主題，象徴的意味などを見る。そして，子どもの場合は，切り方，貼り方，内容に発達面も現れるので，年齢に応じた発達的特徴を理解しておくといよい。また，治療過程で複数の作品が長期間にわたって作られた場合，系統的に見て理解することも必要である等とされてきた。

1998年に森谷<sup>21)</sup>は，コラージュ療法における判断軸の作成を提案し，「心理現象のアセスメントをするには，まずそれが測定可能となるための判断軸を作成することである」「ともかくいろいろな判断軸（物差し）を二極性にしながら作成し，その物差しを個々の作品に当ては

めてみればよい。そして全ての判断軸を、全ての作品に当てはめて評価するのではなく、その作品に一番ふさわしい、すなわち、一番よく特徴が現れていると考えられている物差しを当てはめればよい」と述べた。

そして、これら二極性にしがたった判断軸について、「コラージュ作品のアセスメント」としてまとめ、次のような点を提案している<sup>19)</sup>。「自己像の位置」「時間軸（過去 - 現在 - 未来）」「空間軸（上 - 下，左 - 右，奥行き，接近 - 回避，狭い - 広い），内向 - 外向」「意識 - 無意識，母性 - 父性，ペルソナ - シャドウ，女性性 - 男性性，テンポがゆっくり - 速い，エネルギー低い - 高い，受動 - 能動，冷たい - 暖かい，変わりやすい - 恒常的，暗い - 明るい，寒色 - 暖色，身体 - 精神，具体的 - 抽象的，醜い - 美しい，被害 - 攻撃，静寂 - 喧噪（音のイメージ），孤独 - 共存，無秩序 - 秩序，狭い - 広い，植物的 - 動物的，この世 - あの世」「どの判断軸を設定すると作品が理解できるようになるのか」「できるだけ経過（時間を横軸に）見て解釈すること」と述べている。

また、さらに森谷<sup>19)</sup>は、「コラージュ療法のアセスメント」として、以下の点をあげている。「オープンアーキテクチャ」「選び取ることの重要性」「錯綜した寄せ集まりの中に秩序を見出す」「自己像について尋ねると、視点が定まる」「テーマを見つける（それぞれの発達段階に即したテーマが見つかる）」「内容と形式（心的エネルギーの低い場合は、形式が重要になる）」「心理アセスメントの基礎としてのベクトルの概念の導入（意味と量の総合）」「さまざまな判断軸（ - 物差し - の作成）」。

以上のように、アセスメントの目安となる項目があげられたことにより、筆者はアセスメントの方向性がより具体的に示されたと考える。それまでは、箱庭療法を参考にといい漠然としたものであり、コラージュ療法の特徴も考慮してセラピスト自身が見出さなければならず、視点が定まらない感じを受けていた。特に作品について二極性の判断軸を作成する点は、非常に参考になると思われる。

### 実施の際の留意点

コラージュ療法は、身の回りにある入手しやすい用具，材料を用い，かつ非常に簡単に組み組める技法である。簡単であるだけに，慎重さを要する。森谷<sup>22)</sup>は「コラージュ療法の適用する場合に注意すべきこと」として次のことをあげている。

- ・ 他の芸術療法と同じように，自由にして保護された状況で制作される必要がある。何を表現しても非難されないという安心感が必要。お互いの信頼関係があって，はじめて成立することを忘れないこと。
- ・ 表現することの自由と，表現しない自由も許されるべき。
- ・ 作品について，あるいは個々の切り抜きについて連想を求める時，聞き手は，カウンセリングの原則 - 無条件の積極的関心，共感的理解などの態度 - を持って聞くことが大事。
- ・ 強制的に作らせたものは，治療的には意味がない（防衛的な作品）。

- ・ 学校の授業の一つとして集団で作成するような時，無理やりさせない，表現されたものをからかわない，成績と結びつけないなどの姿勢が大事。
- ・ いわゆる作品のできばえを評価することと，コラージュ療法とは目的が異なる。
- ・ 心理的援助行為の一環としてこれを利用しているので，乱用を避けること。

コラージュ療法のアセスメントについて既に述べたが，解釈を早急にするのは危険だと筆者は考える。特に象徴的な表現と思われやすいパーツがあったとしても，一部と取り上げて短絡的に考えるのは問題だと考える。

象徴について，ユング<sup>23)</sup>が述べている。夢分析に関する言及だが，夢にとどまらず，コラージュ等イメージ表現を受けとめる際に通じると考えられる。以下に全文を記す。

「私はいつも自分の生徒たちに次のように言っている。“象徴性についてできるかぎり勉強すること。その上で，諸君が夢を分析するときは，それを全部忘れてしまうこと”。この忠告は実際の重要性を持っているので，私は、自分が誰かの夢を十分に理解して，それを正しく解釈することは絶対にはないのだということを，まず自分に言い聞かせるのを常としている。私はこうすることによって，自分自身の連想や反応の流れが，自分の患者の頼りなさや躊躇を上まわることのないようチェックしている。分析家が夢の個々のメッセージ(無意識が意識的な心になしつつある貢献)をできるかぎり正確に受け取ることは，最大の治療的な重要性をもっているので，夢の内容を徹底的に探求することは分析家にとって必須なのである。」

中井<sup>17)</sup>は，「夢の解釈の限界がコラージュの解釈の限界を示唆する。逆にいうとコラージュ過程はそれ自身に治療的意味があって，成立した作品の解釈を急ぐ必要がないともいうことができる」と述べている。

筆者も解釈を急がず，クライアント自身による意識化や言語化を待ったり，「わからない」ままじっと待つことがセラピストの姿勢として大切だと考える。「今はわからない。でも何か引っかかる」という状態で待つことができる，これがプロのセラピストとしての姿勢ではないかとさえ考えている。

また，イメージを扱っているという点から，コラージュ療法における同時制作法<sup>18)</sup>には注意を要すると筆者は考えている。同時制作法は，クライアントとセラピストが同時にそれぞれの作品を制作するというものである。セラピストの制作態度及び作品がクライアントに影響を与えていることを十分に考慮する必要がある。そして，セラピストの作品には，セラピストの無意識も含めてイメージが出ているということを考えなければならない。これは，いわば，夢分析においてセラピストの夢をクライアントに語っているのに等しい状態であろう。逆に，無意識のイメージが出るのを警戒し，セラピストが意識的にコントロールして作品を作っても，心理療法における治療関係にはいたらないであろう。

筆者の経験を語れば，以前，筆者も同時制作を試みたことがある。意識して作品を作ってみたが，全くクライアントとの治療関係が深まらず，またクライアントに対しての集中力が保たれず，そのケースではその後早い段階でコラージュ制作を止めてしまった。また別のケースで

も試したが、これはアスペルガー症候群の可能性が高いクライアントであったが、イメージレベルでの相互交流にいたらなかったように感じている。

同時制作法を導入する理由として「同じ作業を行うことで安心感を与える」<sup>24)</sup>と述べるセラピストがいるが、このような理由には疑問を感じる。本来の心理療法では、違う作業をしてもクライアントに安心感を与えることができるのが、セラピストの基本的な技量ではないかと、筆者は考えるからである。

## まとめ

コラージュ療法は、心理療法の一分野である芸術療法に属する方法である。コラージュの価値の再発見により、箱庭療法に匹敵する重要な技法として、森谷によって発案された。これを「レディ・メイドの組み合わせが意味を持つ」と公式的に表現された。

本論では、コラージュ療法の誕生の経緯をはじめ、基本的な点を中心に解説した。引用文献は限られたものであったが、正確に記したものを中心に引用した。

正確な記述に努めてはいたが、一方で、信頼できる資料としてどれを読めばいいのかという、文献に関しての道しるべとしての内容は乏しかった。これらをまとめる必要はある。今後の課題としたい。

また、実施の留意点などから、心理療法に臨むセラピストの姿勢にかかわる部分が多いことに気づかされた。一つの療法を深く学ぶことは、心理療法全体についても考え、知る機会になると感じる。臨床家としてさらに深く研鑽を積んでいきたいと思う。

(注1)

この研究会は、1995年発足。研究会事務局は、現在、鳴門教育大学今田雄三研究室に置く。

(注2)

この学会は、2009年発足。学会事務局は、現在、西九州大学 臨床心理相談室内に置く。

(注3)

1987年の発表後、森谷は2回目の発表を1989年11月の日本芸術療法学会で行っている。この1989年の芸術療法学会で杉浦・入江も発表していたことにより、長期にわたり「偶然に」「日本では、同時発生的に複数の地域でコラージュが始まっていた」という内容が通説のようにされていた。これは、杉浦<sup>25)</sup>の『コラージュ療法入門』の「あとがき」が根拠になっていた。しかし、この「あとがき」の内容が誤りである、すなわちこの歴史が誤りであることを杉浦が2006年8月に表明した<sup>26)</sup>。杉浦は、「今までの私のコラージュの歴史を語るときに秋山先生という言葉に出会ったのは1987年と公表していたが、それは間違いで1988年6月21日であると判明した。この点は今までの出版物での記述を訂正しなければならない」と述べているが、この1年間の訂正によって、私たちもこれまでの歴史を訂正しなければならなくなった。

これまでは、「偶然に」「同時発生的に」箱庭からヒントを得たコラージュが始まっていた

とされてきたが、全くそうではない。箱庭からコラージュを発想した研究の原点は、1987年の森谷の発表であるとしなければならない。そして、これまでの出版物の記述はすべて訂正しなければならない。

なお、この問題が関し、日本心理臨床学会が倫理公告<sup>27)</sup>を出している。

(注4)

コラージュ療法の歴史について、訂正すべき点があることは、注3のとおりである。この誤りとその後の混乱について、文献を元に検証した論文がある(森谷寛之「コラージュ療法の起源をめぐる諸問題 - 基礎となる初期文献資料を中心に - 」臨床心理研究 - 京都文教大学心理臨床センター紀要10, p33-66 2008)。ぜひ、参照されたい。

付記すれば、この論文は、コラージュの価値の再発見から、コラージュ療法の発案、発表にいたる経緯も詳細に記されている。オリジナリティあふれる研究を公表するに至るまでの細やかな経緯を知る意味でも興味深い。

(注5)

1989年11月の日本芸術療法学会での森谷寛之の発表を指す。

#### <引用文献>

- (1) 森谷寛之 『コラージュ療法とは』コラージュ療法学会HP  
(<http://www.kinjo-u.ac.jp/collage/>) 2010
- (2) 森谷寛之 「コラージュとは」 『コラージュ療法とは』コラージュ療法学会HP  
(<http://www.kinjo-u.ac.jp/collage/>) 2010
- (3) 入江茂 「美術史におけるコラージュ」森谷寛之・杉浦京子・入江茂・山中康裕(編)  
『コラージュ療法入門』創元社, p15-25, 1993
- (4) 今村友木子 「現代美術におけるコラージュ」コラージュ表現 - 統合失調者の特徴を探る  
- 』創元社, p8-12, 2006
- (5) 森谷寛之 「心理療法とは」 『コラージュ療法とは』コラージュ療法学会HP  
(<http://www.kinjo-u.ac.jp/collage/>) 2010
- (6) 森谷寛之 「コラージュと心理臨床の関係」 『コラージュ療法とは』コラージュ療法  
学会HP (<http://www.kinjo-u.ac.jp/collage/>) 2010
- (7) 森谷寛之 「臨床場面でのコラージュ技法の歴史」森谷寛之・杉浦京子・入江茂・山中  
康裕(編)『コラージュ療法入門』創元社, p26-32, 1993
- (8) 森谷寛之 「コラージュ療法」第2回コラージュ療法全国研修・研究大会資料 2008
- (9) 森谷寛之 「心理療法におけるコラージュ(切り貼り遊び)の利用(抄)」『精神神経雑誌』  
90, p450, 1988
- (10) 森谷寛之 「はじめに」森谷寛之・杉浦京子・入江茂・山中康裕(編)『コラージュ  
療法入門』創元社, p - , 1993

- (11) 森谷寛之 「日本におけるコラージュ療法の成立と発展」 『コラージュ療法とは』コラージュ療法学会HP (<http://www.kinjo-u.ac.jp/collage/>) 2010
- (12) 森谷寛之 「コラージュ療法の起源をめぐる諸問題 - 基礎となる初期文献資料を中心に - 」臨床心理研究 - 京都文教大学心理臨床センター紀要10, p33-66, 2008
- (13) 山中康裕 「分析心理療法(ユング派), 精神療法による自己実現」 精神科MOOK 15, 吉松和哉編『精神療法の実際』金原出版, 23-33, 1986
- (14) 森谷寛之 「砂遊び・箱庭・コラージュ」森谷寛之・杉浦京子・入江茂・山中康裕(編)『コラージュ療法入門』創元社, p147-115, 1993
- (15) 森谷寛之 「コラージュ療法についての解説」『子どものアートセラピー - 箱庭・描画・コラージュ - 』金剛出版, p141-148, 1995
- (16) 今村友木子 「コラージュ療法の発展」『コラージュ表現 - 統合失調者の特徴を探る - 』創元社, p13-18, 2006
- (17) 中井久夫 「コラージュ私見」森谷寛之・杉浦京子・入江茂・山中康裕(編)『コラージュ療法入門』創元社, p137-146, 1993
- (18) 森谷寛之・杉浦京子「コラージュ技法の導入方法」森谷寛之・杉浦京子・入江茂・山中康裕(編)『コラージュ療法入門』創元社, p5-14, 1993
- (19) 森谷寛之 「コラージュ療法 - 起源と実践」 京都文教大学コラージュ療法研究会資料 2010
- (20) 森谷寛之・杉浦京子(編) 『コラージュ療法』現代のエスプリ386号 至文堂 1999
- (21) 森谷寛之 「コラージュ療法におけるアセスメント」『このはな心理臨床ジャーナル』4,(1), p66-72 1998
- (22) 森谷寛之 「コラージュ療法に関するレジュメ」コラージュ療法全国研修・研究大会ワークショップ資料 2006
- (23) C. G. ユング他(河合隼雄 監訳) 「夢の分析」『人間と象徴』上 河出書房新社 p74-80 1975
- (24) 杉浦京子 「同時制作法」 森谷寛之・杉浦京子(編)『コラージュ療法』現代のエスプリ386号 至文堂, p70-71, 1999
- (25) 杉浦京子 「あとがき」森谷寛之・杉浦京子・入江茂・山中康裕(編)『コラージュ療法入門』創元社, p197-201, 1993
- (26) 杉浦京子 「私のコラージュ事始とコラージュ療法の始まり」アーツセラピー研究所紀要1, p52-56, 2006
- (27) 日本心理臨床学会倫理委員会 「倫理公告」心理臨床学研究27(4), p509 2009